

浄土庭園の事例と定義をめぐる考察

仲 隆裕

(京都造形芸術大学教授)

1. 奈良時代の浄土庭園と平安時代の浄土庭園

「厭離穢土 欣求浄土」という言葉で簡潔に示される浄土思想は、すでに仏教伝来とともに日本に伝わっていた。この思想が寺院の建物と一体となって庭園に表現されたものを「浄土庭園」と呼んでいる。この呼称は戦後に定着した比較的新しい用語である。

奈良時代にすでに法華寺阿弥陀浄土院において、阿弥陀堂の前面に蓮池を開き、仏の清浄常楽の国土を表現しようとした事例がみられる。しかし浄土庭園が盛行するのは平安時代の京都においてであり、末法思想が高まる中期以降、王朝貴族は特に阿弥陀仏に救いを求め、数多くの仏堂が建立されるなかで浄土庭園がつくられるようになったとみられる。

奈良時代と平安時代の浄土思想の相違点は、奈良時代においては死者への追善に重点が置かれていたことに対し、平安時代は自身の浄土への往生を希求するところにあったと考えられている。

2. 浄土庭園と阿弥陀如来

大乘思想においては、十法世界に存在する諸仏のいずれにも仏国土が想定されている。「浄土庭園」は一般的に「極楽浄土をこの世に再現すべく、阿弥陀堂と園池とを一体的に築造した仏寺の庭園様式」(『岩波日本庭園辞典』)と定義されるが、より広義にとらえれば阿弥陀堂の前池のみには限定されない。釈迦の「蜜巖浄土」や薬師如来の「浄瑠璃浄土」なども存在するのであり、たとえば浄瑠璃寺庭園は園池の東側に建つ三重塔に薬師如来が、西側に阿弥陀堂が

建ち、両者の浄土を表現していると捉えられる。毛越寺では現在仏殿は失われているが、園池北岸の金堂(円隆寺)には薬師如来が祀られていた。

平安時代中期以降の浄土庭園の盛行は、藤原道長が寛仁4年(1020)に造営した無量寿院阿弥陀堂に始まる。西方の彼方に位置するという阿弥陀浄土をこの世にあらわそうとしたもので、九体阿弥陀如来を本尊とする阿弥陀堂が東向きに建てられ、その前面に中島を持つ園池が開かれた。のち園池の北には金堂・五大堂、東には薬師堂など諸堂が建ち並び、病氣平癒や藤原摂関家の安泰という現世利益をも祈願する一大伽藍となり、名も法成寺と改められる。しかし道長が臨終の時を迎えたのは阿弥陀堂においてであり、阿弥陀如来に導かれて浄土に往生することを念じた。

道長は若い時から寺院への参詣もたびたびで、祖先の供養のために浄妙寺を建立するなど仏教への信仰も篤かった。その晩年は特に阿弥陀仏信仰に傾倒し、臨終行儀も源信のあらわした『往生要集』に沿って行われた。道長の曾祖父・藤原忠平の日記「貞信公記」には興福寺の『観無量寿経』の九品往生段を題材とした「九品往生図」を模写させた、との記事がある。九品来迎図は極楽往生を願う者の臨終に阿弥陀如来が菩薩聖衆を従えて迎えに現れる情景を描いたものである。これを実際の阿弥陀堂・庭園によって三次元化しようとしたものが無量寿院であったと考えられる。なお、九体阿弥陀堂は記録上三十数例確認されているが、現存する事例は浄瑠璃寺(京都府木津川市加茂)一例のみである。

国家鎮護と自身の極楽浄土への往生を願った藤原道長の法成寺は大規模な「臨池式伽藍」であった。一

方、頼通の造営した平等院は道長の宇治別業を施入したもので、阿弥陀堂を主体とする比較的小規模ながら、園池の中島上に阿弥陀堂が建つという斬新な配置計画をみせる事例である。杉本氏の報告は、平等院においていかに立地を活かして阿弥陀浄土の世界が現出されたかを詳細に分析している。興味深いことは、当初は頼通の極楽への往生を希求する空間であった平等院が、のちには頼通の追善の空間としても供養されていることである。

鎌倉時代以降、武家によって営まれた浄土庭園は再び追善が重要なテーマとなっていくことと関連するかもしれない。

3. 平泉の浄土庭園群の特徴

浄土庭園は京都から全国へと波及していくが、佐藤氏の報告によれば、平安時代中期以降京都で個々に展開した浄土庭園の特徴すべてが、平泉においては都市全体に計画的に配置され、奥州藤原氏の政治的理想を具現化する形となっているという。

毛越寺は法成寺に対抗して白河上皇が造営した法勝寺をモデルとした大伽藍で、金堂(円隆寺)の南に広がる園池、東北から蛇行して池に注ぐ遣水は寝殿造庭園の典型的手法を踏襲している。これは「法成寺型」の浄土庭園といえよう。ただし毛越寺には阿弥陀堂を欠くのであるが、それは三代秀衡の無量光院として平等院をモデルに造営されているとみられる。そして「中尊寺建立供養願文」にみられるように、平泉の浄土庭園群のはじまりといえる中尊寺は初代清衡によって「国家鎮護」の寺院として造営されているのである。

この平泉の浄土庭園群の歴史文化的価値としては、鎌倉の都市づくりに影響を与えたという点も評価されてよいだろう。

4. 東国の浄土庭園と室町時代への展開

奥州藤原氏を攻め滅ぼし、鎌倉幕府をひらいた源頼朝は文治5年(1189)、鎌倉に戦没者の極楽往生と自らの安穩を願って永福寺を建立するが、そこには二階堂・阿弥陀堂・薬師堂の3つの仏堂が立ち並び、前面に広大な浄土庭園が営まれていた。頼朝は平泉の浄土伽藍に感銘を受けたようで、『吾妻鏡』によれば二階堂の仏後壁は円隆寺を模写したものといい、建築や庭園の配置にも平泉の影響が多く見られる。

頼朝の奥州征伐の戦勝祈願のために北条時政が建立したと伝える願成就院(静岡県韭山)にも浄土庭園があったと推定されているが詳細は不明である。足利氏の本貫地である栃木県足利市にある樺崎寺(樺崎八幡宮)は、源氏一族である足利義兼が奥州征伐の戦勝を祈願し、帰国後伽藍を本格的に整備した寺院であり、大規模な浄土庭園の存在が発掘調査で確認されている。近年史跡に指定され、庭園の復元整備が進められつつある。そのほか、平泉の浄土庭園に影響を受けたと考えられる東国の浄土庭園についても、近年研究が進展しつつある。

戦闘による死者を追善供養する場としての浄土庭園は、室町時代(南北朝時代)にも営まれている。室町幕府を開いた足利尊氏は後醍醐上皇の鎮魂のために天竜寺を造営し、嵐山を背景として仏殿西側に園池を営んだ。その庭園を作庭した夢窓礎石は西芳寺において浄土庭園と枯山水を併置する新様式を創出する。このように室町時代には禅宗寺院に浄土庭園が組み込まれ、さらに西園寺北山第、足利義満の北山殿、足利義政の東山殿などにおいて新しい形態と意匠を見せることになる。

このような新しい流れの中で、「法成寺型」の浄土庭園は金沢貞顕が元亨3年(1323)に完成させた称名寺庭園(下図)がおおよそ最後の事例となるようである(村岡正『史跡称名寺境内庭園苑池保存整備報告書』、1988年)。